

2026年4月22日

全国の教会・伝道所の女性会の皆さま
教会に集う皆さま

日本バプテスト女性連合
6・23「沖縄(命どう宝)の日」推進委員会

「祈り便」第70信(4月～7月)のご案内

「命どう宝」——平和の祈りをともに

6・23「沖縄(命どう宝)の日」推進委員会委員長 河内 理恵(目白ヶ丘)

2月の衆議院選挙のあと、「#ママ戦争止めてくるわ」という記事を読みました。ある女性が、期日前投票に行くときに子どもへかけた言葉。SNSに投稿したところ大きな共感呼び、たくさんの方が「パパも」「独身も」「私も」とさまざまな立場で「自分も」と投稿してくれたことがうれしかったと取材に応じていました。

何気ない日常の中からこぼれた言葉。でもそこには、「自分の子どもに血を流させたくない」という切実な思いが込められていました。そしてそれは、「どの国の子どもも、誰一人として戦争で傷ついてほしくない」という願いにつながっているのではないのでしょうか。

この思いは、沖縄の人たちが大切にしてきた「命どう宝(ぬちどうたから)」と重なります。

80年前の1945年、沖縄は国内唯一の地上戦の場となりました。約3か月にわたる激しい戦闘の中で、住民を含む20万人以上の尊い命が失われたといわれています。軍人だけでなく、多くの一般市民、子どもや高齢者までもが戦火に巻き込まれました。強制集団死に追い込まれた人びと、避難壕から日本軍に追い出されて命を落とした家族、陸軍の看護師の代わりに働かされた学生。この痛みと深い悲しみの体験の中から生まれ、受け継がれてきた言葉が「命どう宝」です。一人ひとは神さまからつくられた大切な命という祈りの表れです。武力によっては真の平和は築けないという叫びでもあります。

沖縄では今も基地問題の中で、不安や危険と隣り合わせの生活が続いています。しかしそれは決して「沖縄の問題」ではありません。沖縄に集中する基地を負担させているという「わたしたち一人ひとりの問題」であることに向きあっていかなければならないと思います。誰かの負担の上に成り立つ平和はありません。悔い改めて、すべての人の命が大切にされる平和を求めて祈っていきたくないと願います。

今年も「祈り便」を通して、全国の仲間と祈りを合わせていきたくと思います。6月には「沖縄6・23学習ツアー」も予定されています。見て、聞いて、出会ったことを分かち合いながら、平和をつくり出す祈りの輪を広げていけたらと願っています。

「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」(マタイによる福音書5章9節)
み言葉に励まされながら、平和をつくり出してくださる神さまとともに、歩んでまいりましょう。

(『世の光』2026.4月号「沖縄—知る・祈る・共有する—」より)